

体育授業における
グルーピング方法に関する研究
— 小学校体育授業におけるグルーピング方法に関する調査より —

元 塚 敏 彦

A Study of Grouping Method for P.E Class in
Elementary School

Toshihiko MOTOTSUKA

皇學館大学教育学部研究報告集 第2号

平成22年3月

体育授業における グルーピング方法に関する研究

— 小学校体育授業におけるグルーピング方法に関する調査より —

元 塚 敏 彦

キーワード 小学校体育授業 グルーピング

I 緒 言

平成20年8月に学習指導要領が改訂された。「確かな学力」の確立をめざす学習指導要領改訂の基本方針を受け、体育科では、学習内容の明確化と体系化が図られた。(以後、小学校体育科の運動領域を「体育科」と示す)

この学習内容の明確化と体系化を具体的に考えるために資料1のように小学校3・4年のゲーム領域における技能内容を例に「現行要領」と「新要領」を比較した。^{*1} (以後、現行学習指導要領を「現行要領」、改訂学習指導要領を「新要領」と略した)

「現行要領」の内容は、その運動や種目で何をどのように指導するかを各学校や指導者の裁量に任されていた。しかし、「新要領」では、種目名ではなく、3つの「型」で内容が構成され、それぞれについて下線で示したように、どのような技術を身に付けさせるかを学習の結果として示している。以上のような内容の示し方は、他の領域においても同様である。

このような学習内容の明確化と体系化によって、「新要領」による体育授業は、基礎・基本の重視、知識と技能の確実な習得を目指すという「現行要領」の考え方を踏襲するだけでなく、「新要領」に示された内容を確実に習得させるという授業成果を求められることになった。

資料 1

「現行要領」と「新要領」における小学校3・4年ゲーム領域の技能内容に関する比較

- 「現行要領」のゲーム領域における技能内容の記述
バスケットボール型ゲーム、サッカー型ゲーム及びベースボール型ゲームについて、友達と規則を工夫し、簡単な技能を身に付け、ゲームが楽しくできるようにする。
 - 「新要領」のゲーム領域における技能内容の記述
次の運動を楽しく行い、その動きができるようにする。
ア ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作やボールを持たない時の動きによって、易しいゲームをすること。
イ ネット型ゲームでは、ラリーを続けたり、ボールをつないだりして易しいゲームをすること。
ウ ベースボール型ゲームでは、蹴る、打つ、捕る、投げるなどの動きによって、易しいゲームをすること。（アンダーランは筆者加筆）
-

このような改訂の趣旨に応える授業づくりのためには、これまで以上に「よい授業の条件」とされる「内容的条件」と「基礎的条件」*²*³を整える必要がある。「内容的条件」の見直しについては、学習過程の工夫や教材開発などを中心にすでに行われているが、「基礎的条件」については、積極的に行われているとは言い難い。しかし、「内容的条件」の工夫は、「基礎的条件」のもとに発揮されることから、「新要領」に応える授業づくりのためには、まず「基礎的条件」を整えることが必要である。

本研究では、「基礎的条件」の中から、グルーピング*⁴の問題をとりあげることにした。その理由は、以下のとおりである。（体育の授業では、元の集団を班やグループ、チームなどと呼ぶ小集団に分けて学習が展開されることが多い。本研究では、この小集団にわける作業を「グルーピング」と呼ぶことにした）

理由の1つ目は、体育授業は集団で学習活動が行われることが多いことである。集団による学習に期待されることは、子どもたち相互の関係から知識が生み出され、習得されること、さらにお互いに学び合うとともに、助け合う態度を身に付けることである。しかし、体育授業の場合、集団間のほどよい競争意識は集団の凝集性や協力体制を高め、学習意欲を高めることになるが、競争の

みが目的となると、競争の結果を個人の問題とするようになり、差別意識や排他的態度を生み出すことになる。その結果、一部の子どもは、学習意欲を無くしてしまうというマイナス面が心配される。^{*5}

「新要領」に應える授業づくりのためには、このような集団による学習のマイナス面を抑え、その効果がすべての子どもに発揮されなければならないことから、集団をどのように構成するかというグルーピング方法の研究が必要であると考えた。

2つ目の理由は、現代の子どもたちの実態である。家族の少人数化、一人遊びの増加などから、幼少年期に兄弟や遊び仲間との間に起こるトラブルを経験したことがない、また、それらを解決したこともない、他者との関係の結び方を知らない、他者を思いやれない、さらには、関係を持ちたくないと思える子どもが多くなっているといわれている。このような子どもの状態は、体育科の改善の基本方針に「体育については、……コミュニケーション能力を育成することや……」^{*6}とあること、また、「仲間との交流」の必要性から、平成10年改訂の学習指導要領の5・6年生に「体づくり運動」領域の内容として「体ほぐしの運動」が示されたことから理解できる。

このような集団による学習が苦手な負担に感じる傾向にある子どもたちに、学習内容を確実に身に付けさせるためには、学習仲間と関係を結び、集団による体育授業の効果を十分に受けることができるグルーピング方法の研究が必要であると考えた。

しかし、これまで体育分野における集団に関する研究は、集団による学習効果や集団によって何を教えるかという教科論的研究が中心であった。例えば、学習形態の問題として、一斉指導をより効果的に行うための班別指導をどう展開するか、また、民主的な人格形成を目指すグループ学習の方法などの研究が行われてきた。^{*7*8*9*10*11*12}

このように体育分野の集団に関する研究の中心は、集団による効果や学習内容とその方法の議論であり、集団をどのように作るかというグルーピング方法を明らかにする研究は行われてこなかった。

また、教育学の分野においても同様に、全体学習とグループ学習の比較とし

て、グループの人数、期間、グループ内やグループ間の能力差の問題などが方法的に扱われているのみで、グループをどのようにつくるかというグルーピングに関する具体的な説明が行われてこなかった。^{*13}

さらに、グルーピングに関する実践報告を最近10年間（2000年1月～2009年8月）の月間雑誌「体育科教育」116冊に求めた。その結果は資料2のようであり、グループやチーム分けの報告はあるものの、グルーピング方法や条件についての記述は、139例中13例にみられただけであった。多くの実践報告は、それぞれに課題を持ったものであることから、グルーピングに関する記述が省略されているものと推察されるが、多くの実践では、指導者の細かな配慮によってグルーピングが行われているものと思われる。また、集団内の人間関係や集団と集団の関係などに起因するトラブルについては、指導者の力量内で対処され、授業が進められていると思われる。

しかし、子どもの実態や体育授業の特徴からすれば、実践報告の課題に関係なく、グルーピングに関する報告が行われるべきである。グルーピングに関する記述の少なさは、指導者のこの問題への関心の低さを表すものと理解できる。指導者がこの問題への関心を高めるためにも、グルーピングに関する研究が必要であると考え。

そこで、体育授業の特徴や集団学習にかかわる子どもの特徴、これまでのグルーピングに関する授業研究の実態から「新要領」に応える授業を行うためには、どのようにグルーピングを行うかを明らかにする必要があると考え、小学校体育授業におけるグルーピング方法に関する研究を行うことにした。

資料 2 「グルーピングに関する実践報告」

調査資料：月刊誌「体育科教育（大修館書店）」2000年1月号～2009年8月号

調査冊数：116冊 実践報告数^(※1)：139例 グルーピングに関する報告：21例

グルーピングの結果が記載されていたもの：19例

グルーピングの方法や条件が記載されていたもの：13例

※1 ここでは「体育科教育」に掲載されている論文や報告の中から、単元計画と単位時間計画の記載されているものを実践報告とした。

実践報告は、各テーマについて詳細に報告されているので、21例以外の授業でも、グルーピングにかかわって、多くの工夫や配慮がおこなわれていたものと思われる。

体育授業におけるグルーピング方法に関する研究

No	発行年月	テ ー マ	学 年	グルーピングの方法や条件	グルーピングの結果
1	200011	15m走	小 6	生活班を利用	男女混合 5 人／組
2	200101	チャレンジ運動	小 6	未記入	男女混合異質 6～7人／組
3	200101	チャレンジ運動	小 6	未記入	男女混合 6～7人／組×6組
4	200106	バウンドボール	小 3	教室の班編成利用	男女混合 6～7人／組×6組
5	200203	フラッグ フットボール	小 5	未記入	男女混合 6 人／組
6	200308	サッカー	小 3	生活班を利用	ペア学習
7	200312	ソフト バレーボール	小 6	運動能力を配慮したチーム 分け	未記入
8	200401	フラッグ フットボール	小 5 6	未記入	グループ間等質, グループ内異質
9	200404	アルティメット	高 3	クラス代表に男女数や運動能力 などを考慮して決めさせた	
10	200406	水 泳	中 1	課題別に編成	課題別グループ
11	200503	基本の運動	小 2	生活班を利用	兄弟班にして 4 組
12	200505	ソフト バレーボール	小 6	未記入	男女混合異質 6～7人／組
13	200606	セストボール	小 3	子どもと強さが同じになる ように決めた	3～4人／組
14	200612	水 泳	小 6	未記入	異質 4～6人／組
15	200702	ハードル走	中 2	40mフラット走のタイムを 参考に編成	異質 6～7人／組
16	200704	ハンドボール	中 3	チームの作り方を説明した 後、生徒に任せた	
17	200704	バスケットボール	小 6	未記入	男女混合 6 人／組
18	200705	ベースボール型 ゲーム	小 1	未記入	男女混合 17～18人／組
19	200706	リレー競走	小 6	100mの記録からメンバーの合 計タイムが同じになるように	男女混合 5～6人／組
20	200707	忍者のダンボール ゲーム	小 3	動能力を配慮して	男女混合 3 人／組
21	200707	剣 道	中 3	未記入	男女混合 4～5人／組

Ⅱ 研究目的

グルーピング方法のあり方を明らかにする基礎的研究として、以下に示す小学校体育授業におけるグルーピングに関する内容について実態を明らかにする。

- 1 小学校指導者のグルーピングに関する問題意識
- 2 グルーピング方法の実際
- 3 グルーピングに関わる問題の有無

Ⅲ 研究方法

1 調査方法

(1) 対象

奈良体育授業研究会の参加者16名を中心に調査協力者を募り、奈良県下の小学校指導者72名の協力を得た。協力者の特徴は、表1～4のとおりである。

(2) 時期と回収

郵送配置法により平成21年7月～8月に依頼、9月に回収した。

(3) 対象授業数

協力者には、グルーピングを行った授業の中で最近の2例について回答を求めたため、調査対象授業は132授業となった。各授業の学年、領域、クラスの特徴は表9～10のとおりである。

2 調査用紙の作成

前述のようにグルーピング方法に関する研究は少なく、資料2に示す実践報告や現職小学校指導者の意見、「小学校体育指導資料 新しい学力観に立つ体育科の授業の工夫」*14、「新しい体育授業の創造」*15などの文献を参考に以下の4群からなる質問を作成した(資料3)。

(1) 指導者の特徴に関する質問

グルーピング方法の決定に影響する指導者の特徴を問う質問として、アー経験年数、イー性別、ウー体育授業の得意度^(※1)、エーグルーピングに関する問題意識の4問を準備した。(※1 ウー体育授業の得意度に関する質問意

図は、小学校の授業は担任制で実施されているため、各教科の得意、不得意の差が大きく、その指導者の特徴がグルーピング方法の決定に影響を及ぼすのではないかと考えた)

(2) 授業の特徴

グルーピング方法の決定に影響する授業及びクラスの特徴を問う質問として、ア—実施種目(現行学習指導要領による領域)、イ—学年、ウ—クラスの間関係や雰囲気に関する問題の有無の3問を準備した。

(3) グルーピング方法の実際

実際の授業でグルーピングがどのように行われているかを問う質問として、ア—グルーピングの方法、イ—グルーピング方法の決定者、ウ—グルーピングの作業者、エ—グルーピング時の配慮内容の4問を準備した。

(4) 授業後のグルーピングに関する問題の有無

この質問については、選択肢を設けず、指導者にグルーピングに起因する問題であるかどうかの判断を任せ、問題があった授業には、記述説明を求めた。その結果132授業中33授業にグルーピングに関わる問題があった。

3 統計処理

調査結果の統計処理は、spss統計パッケージver. 16 familyを用いた。

資料 3 「グルーピング方法に関する調査」

-
- 1 指導されて何年目ですか。
 - 2 性別をご記入ください。
 - 3 体育の授業は、得意ですか。以下の中から1つ選択してください。
①大変得意 ②得意なほう ③他教科と同じ ④不得意なほう ⑤最も不得意
 - 4 グループ分けについて先生のご意見をお伺いします。先生と同じ考え方を以下から1つ選択してください。
①同じ考えである(そう思う) ②どちらでもない ③考えない(思わない)
- (1) 授業を考えると、いろいろな問題が想起されるが、その中でもグループ分けは、大きな問題であるとする。
- (2) グループ分けは、授業の成功、失敗を決定する大きな要因であるとする。
- (3) グループ分けによる様々な問題は、事前に避けるように調整すべきである。
- (4) グループ分けによる様々な問題を体験したり、それを解決しようとするのも大切な学習であって、特に配慮を必要とする子どもがいない場合は、調整する必要はない。

- 5 何年生の授業で 種目は何でしたか。
- 6 授業実施は何年でしたか。
- 7 クラスの人間関係や雰囲気はどうでしたか。以下から1つ選択してください。
① 大変よかった ② よかった ③ ふつう ④ わるかった ⑤ 心配なことがあった
- 8 グループ分けは、どのように決められましたか。それぞれ1つ選択してください。
- (1) 一どのような方法で決められましたか。(具体的方法)
- ① 出席番号を利用して ② 抽選で ③ 生活班を使って
④ 整列隊形を利用して ⑤ 身長順などを利用して
⑥ 子どもたち(教員や子どもたちから指名された)が、グループ力(グループの技能面での均等)を考えて
⑦ 教員が、グループの技術面での均等、運動の得意な子どもと不得意な子どもの散らばり、リーダーシップを発揮できる子どもの散らばり、グループ内の人間関係などを考えて
⑧ その他 ()
- (2) 一だれが、質問(1)の方法を決定しましたか。(方法の決定者)
選択欄より選んでください。
- (3) 一だれが、質問(1)の方法で、実際にグループ分けを行いましたか。(作者者)
選択欄より選んでください。

- | | |
|-----|--|
| 選択欄 | ① 教員
② 教員と子どもたち(教員が子どもたちと相談して、教員が決めた形にした)
③ 子どもたちと教員(教員が子どもたちと相談して、子どもが決めた形にした)
④ 教員が、指名した代表やキャプテンと教員が相談して決めた
⑤ 教員が、指名した代表やキャプテンが相談して決めた
⑥ 子どもたちが、指名した代表やキャプテンと教員が相談して決めた
⑦ 子どもたちが、指名した代表やキャプテンが相談して決めた
⑧ 子どもたちみんなで相談して決めた
⑨ その他 () |
|-----|--|

- 9 グループ分けの時は、どのようなことに気がつかわれましたか。以下から1つ選択してください。
- ① 大変気をつかった ② 気をつかった
③ あまり気にしなかった ④ 全く気にしなかった
- (1) グループ間の技能的な均等
(2) グループ内の人間関係
(3) リーダーシップを発揮できる子どもの散らばり具合
(4) 運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合
(5) グループ分けに子どもたちの気持ちを反映させること
- 10 グループ分けに関係したトラブルはありましたか。有と無でお答えください。有の場合、どのようなトラブルであったか、よければ教えてください。
- 無 ・ 有 ()

IV 結果と考察

1 小学校指導者のグルーピングに関する問題意識

今回の調査では、資料4「グルーピングに関する問題意識内容」を指導者のグルーピングに関する問題意識とした。

資料4 グルーピングに関する問題意識内容

-
- ①「グループ分けは授業における大きな問題である」と意識するかどうか（以後「授業における重要性に関する意識」と略した）
 - ②「グループ分けは授業の成功・失敗を決定する大きな要因である」と意識するかどうか（以後「授業成否の決定性に関する意識」と略した）
 - ③「グルーピングの問題は事前に解決すべき問題である」かどうかの意識（以後「事前調整の必要性に関する意識」と略した）
 - ④「グルーピングの問題は学習内容であり、事前に解決する必要がない」かどうかの意識（以後「学習内容性に関する意識」と略した）
-

(1) 小学校指導者のグルーピングに関する問題意識

資料4の各問題意識の実態を表1「グルーピングに関する問題意識の実態」に示した。

その結果、①「授業における重要性に関する意識」では、84%、②「授業成否の決定性に関する意識」では、63.1%の指導者が、グルーピング問題は、授業に関わる多様な問題の中でも大きな問題であり、しかも、それは授業の成否を決定する問題であると意識されていることがわかった。しかし、②「授業成否の決定性に関する意識」結果は、①「授業における重要性に関する意識」の結果に比べて「そう思う」の数が減少していた。これは、授業の成否には多様な原因のあることが反映し、回答が分散したものと思われる。

続いて、③「事前調整の必要性に関する意識」と④「学習内容性に関する意識」の結果は、回答にばらつきが見られた。特に、④「学習内容性に関する意識」では、「そう思う」が40%、「どちらでもない」が36.2%、「そう思わない」が23.8%となり、集団学習で発生する問題の解決を学習内容にするかどうか

かの意識は、指導者によって異なっていることを示す結果となった。

この結果は、指導者の集団学習を学習形態論的に授業効果を高める手段として活用するものと考えるか、学習目標・内容論的に集団で学習することを目標として、集団内、集団間に起こる問題の解決を学習の対象とするという2つの考え方が反映されているものと思われる。「新要領」では、学習内容を明確に示し、その内容を確実に身に付けることを求めている。「新要領」に応える授業のためには、集団学習を手段とするか学習目標とするかを対立的に捉えるのではなく、方法としての集団学習と目標としての集団学習のあり方を合わせて考えることが必要であると思われる。

(2) 指導者の特徴

今回の調査では、指導者の特徴を「経験年数」、「性」、「体育授業の得意度(以後「得意度」と略した)」とし、表2～4にまとめた。表2の「経験年数」は、「経験年数」の比較を容易にするため便宜的に10年ごとの3群にまとめている。表2, 3より、今回の調査対象指導者には「経験年数」、「性」別に大きな偏りのなことがわかった。また、表4では、同じく比較を容易にするために5件法を3件法に置き換え「得意」・「普通」・「不得意」の3群に分けて示した。表4から体育の授業を得意とする指導者が若干多いことがわかった。さらに、表5, 6には、「得意度」と「経験年数」、「性別」の関係をまとめた。

表5から「得意度」と「経験年数」の関係には、偏りのないことがわかった。また、表6の結果から、男性に授業の得意な指導者が多く、女性に不得意な指導者の多いことがわかった。

(3) グルーピングに関する問題意識と指導者の特徴

ここでは、表1に示したグルーピングに関する問題意識の持ち方は、表2～4に示す指導者の特徴に影響を受けるのかどうかを明らかにしようとした。そのため、順序尺度で求めた問題意識の回答を簡便法により、グルーピングを問題としている強さの程度とし、強さに応じて3点から1点の間隔尺度に置き換え、問題意識点とした。

ア. グルーピングに関する問題意識と「経験年数」の関係

「経験年数」が各問題意識の持ち方に及ぼす関係を明らかにするため、表7

に経験年数別各問題意識点の平均値を問題意識の内容別にまとめた。この結果について各問題意識内容ごとに一要因分散分析を行い、有意に交互作用がみられた問題意識内容について、さらに多重比較を行った。その結果、②「授業成否の決定性に関する意識」の持ち方の違いに指導者の「経験年数」の特徴が有意な条件であり、経験年数21年以上の指導者が、経験年数10年以下の指導者に比べて5%水準で有意に高い意識を持っていることが明らかになった。

この結果は、経験年数の長い指導者がこれまでグルーピングに関する問題を多く経験してきたからであると考えられる。このことから経験の浅い指導者はグルーピングに関して問題意識を持つことが必要ではないかと思われる。

イ. グルーピングに関する問題意識と「性」, 「得意度」の関係

表6は、指導者を「性」別, 「得意度」別に集計したものである。この表は、男性に授業を得意とする指導者が多く、逆に女性に授業を不得意とする指導者の多いことを示している。そこで「性」と「得意度」の特徴は、互いに関連しあって「問題意識」の持ち方に影響を及ぼすのではないかと判断し、これらの関係について各問題意識内容ごとに二要因分散分析を行った。その結果は表8に示すように、①「授業における重要性に関する意識」について2次交互作用が見られたが、②「授業成否の決定性に関する意識」③「事前調整の必要性に関する意識」④「学習内容性に関する意識」については、2次交互作用が見られなかった。そこで、2次交互作用のあった①「授業における重要性に関する意識」への「得意度」の及ぼす影響を調べるため、男女別に1要因分散分析を行った。その結果、男性では、表8-1のように「得意度」の違いは①「授業における重要性に関する意識」の持ち方に影響する有意な条件でなかった。しかし、女性では、表8-2のように有意な条件であったので、さらに多重比較を行った。その結果、女性で授業を「得意とする指導者」と「不得意」とする指導者は、「どちらでもない」という指導者に比べて、「グルーピングの問題は授業における重要な問題である」という意識を5%水準で有意に高く持っていることが明らかになった。

この結果について、体育授業を「不得意」とする指導者と「得意」とする指

導者の授業前の考え方や構え方から以下のように考えた。

体育授業を「不得意」とする指導者は、授業前に何の準備もなしに、いつも体育の授業に失敗しているということではないはずである。逆に不得意という意識から授業前には相当の準備が行われているものと推察したい。そのため、授業を「不得意」とする指導者は、グルーピング問題に限らず授業前には、多くの問題について悩みや不安を持っているはずである。このような悩みや不安から、グルーピング問題も重要な問題であると意識しているのではないかと思われる。

また、体育授業を「得意」とする指導者は、これまで授業がうまくいったという成功体験を多くしてきたはずである。そして、授業前のグルーピング問題を大切にすることが授業を問題なく進め、授業成果につながったという多くの成功経験から、グルーピング問題を授業の重要な問題であると意識し、授業成果を残すために必要なものとしてグルーピング方法を重視しているのではないかと思われる。

「どちらでもない」という指導者は、授業前の悩みや不安の程度が、「不得意」な指導者より少なく、また、集団学習の成果を実感した経験が「得意」な指導者よりすくなく、このようにグルーピング問題を授業の重要な問題として意識することが少なかったのではないかと思われる。

表1 グルーピングに関する問題意識の実態

問 題 意 識		そう思う	どちらでもない	そう思わない	全 体
① 授業における重要性に関する意識	n	109	19	2	130
	%	83.9	14.6	1.5	100
② 授業成否の決定性に関する意識	n	82	41	7	130
	%	63.1	31.5	5.4	100
③ 事前調整の必要性に関する意識	n	44	75	11	130
	%	33.8	57.7	8.5	100
④ 学習内容性に関する意識	n	52	47	31	130
	%	40	36.2	23.8	100

表2 指導者の特徴（経験年数別人数）（N=人数）

	1-10	11-20	21-	全体
N	41	55	34	130
%	31.5	42.3	26.2	100

表3 指導者の特徴（性別人数）

	男	女	全体
N	71	61	132
%	53.8	46.2	100

表4 指導者の特徴（体育授業の得意度別人数）

	大変得意	得意	普通	不得意	最不得意	全体
N	5	56	44	20	7	132
%	3.8	42.4	33.3	15.2	5.3	100

表5 「得意度」別「経験年数」別指導者数

	不得意	普通	得意	合計
-10	11	8	22	41
11-20	6	25	24	55
21-	10	9	15	34
合計	27	42	61	130

表6 「得意度」別「性」別指導者数

	不得意	普通	得意	合計
男	4	23	44	71
女	23	21	17	61
合計	27	44	61	132

表7 問題意識の内容別、「経験年数」別問題意識点の関係

		経験年数			1要因分散分析 F値	多重比較LSD (p<.05)
		a 1-10	b 11-20	c 21-		
		N	41	53		
① 授業における重要性に関する意識	M	2.76	2.83	2.88	0.85	
	SD	0.54	0.38	0.33		
② 授業成否の決定性に関する意識	M	2.37	2.60	2.76	4.52*	a < c
	SD	0.77	0.49	0.43		
③ 事前調整の必要性に関する意識	M	2.15	2.30	2.32	1.04	
	SD	0.53	0.61	0.68		
④ 学習内容性に関する意識	M	1.66	1.92	1.97	1.89	
	SD	0.69	0.85	0.76		

(N=人数) (M=平均値) (SD=標準偏差)

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表8 問題意識の内容別、「性」「得意度」別と「題意識」の関係

		一 意 的 な 方 法			
		平方和	自由度	F 値	有意確率
① 授業における重要性に関する意識	(結合された)	0.727	3.000	1.426	0.238
	主効果 性別	0.020	1.000	0.120	0.730
	得意度別	0.725	2.000	2.133	0.123
	2次交互作用 性・得	1.254	2.000	3.690*	0.028
	モデル	1.854	5.000	2.181	0.060
	残差	21.077	124.000		
	合計	22.931	129.000		
② 授業成否の決定性に関する意識	(結合された)	2.801	3.000	2.770	0.044
	主効果 性別	0.358	1.000	1.062	0.305
	得意度別	2.204	2.000	3.269	0.041
	2次交互作用 性・得	2.021	2.000	2.997	0.054
	モデル	3.925	5.000	2.328	0.046
	残差	41.806	124.000		
	合計	45.731	129.000		
③ 事前調整の必要性に関する意識	(結合された)	0.451	3.000	0.406	0.749
	主効果 性別	0.293	1.000	0.790	0.376
	得意度別	0.098	2.000	0.133	0.876
	2次交互作用 性・得	0.403	2.000	0.544	0.582
	モデル	0.707	5.000	0.382	0.860
	残差	45.916	124.000		
	合計	46.623	129.000		
④ 学習内容性に関する意識	(結合された)	3.893	3.000	2.202	0.091
	主効果 性別	0.143	1.000	0.243	0.623
	得意度別	2.283	2.000	1.937	0.148
	2次交互作用 性・得	3.001	2.000	2.546	0.082
	モデル	6.532	5.000	2.217	0.057
	残差	73.075	124.000		
	合計	79.608	129.000		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表8-1 男性指導者における「得意度」別「題意識」の関係

		得 意 度			1要因分散分析 F 値	多重比較 LSD (p<.05)
		a 得意	b 中間	c 不得意		
① 授業における重要性に関する意識	N	44	21	4	0.582	
	M	2.81	2.77	3.00		
	SD	0.522	0.359	0.000		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表8-2 女性指導者における「得意度」別「題意識」の関係

		得 意 度			1要因分散分析 F 値	多重比較 LSD (p<.05)
		a 得意	b 中間	c 不得意		
① 授業における重要性に関する意識	N	17	21	23	6.769**	b<a, b<c
	M	3.00	2.62	2.91		
	SD	0.000	0.498	0.288		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

2 グルーピング方法の実際

ここでは、グルーピング方法やグルーピング時の配慮内容は、様々な授業の特徴に影響を受けることから、表9・10にまとめた(ア)学年(イ)領域、(ウ)「クラスの間関係や雰囲気の問題」と表11～14にまとめたグルーピング方法の実際やグルーピング時に指導者が行った配慮との関係を考察することにした。

授業で行われたグルーピング方法は、表11に示すように⑦「指導者が技術や人間関係などを考えて決めた」が38.7%、⑥「子どもたちが決めた」が24.2%、③「生活班をつかった」が18.2%となり、かなりばらつきがみられた。しかし、表12のグルーピング方法の決定者は、94.6%に指導者が関わり、表13のグルーピングの作業者では、82.6%に指導者が関わっていたという結果となり、指導者のグルーピングに関する強い指導性を示すものであった。そこで、本研究では「授業の特徴」や「クラスの特徴」の問題は、表12や13の結果に影響しないと判断し、回答にばらつきが見られた(1)「グルーピング方法」の結果と(2)「グルーピング時における配慮内容」の結果への影響について考察することにした。

(1) 授業の特徴とグルーピング方法の関係

(ア) 学年とグルーピング方法の関係

表15は、低中高学年別(※2)にグルーピング方法を示したものである。

この表から、低中学年では、既にクラスで組織されている集団を用いたグルーピングや身長、隊列などによるグルーピング(※3)が多く、また、逆に高学年になるにつれては、運動技能や人間関係によるグルーピング(※4)が行われていたことがわかる。(※2 学習指導要領には2学年単位で学習内容が示されていることから学年を低中高学年に分けた、※3 運動技能や人間関係に関係のない方法を「既存方法」、※4 運動技能や人間関係に関係する方法を「特別方法」と略した)

表15-1は、学年を低・中・高学年に、グルーピング方法を「既存方法」と「特別方法」に分けて示したものである。この表より、学年の進行に従って、「特別方法」によるグルーピング方法が採用される傾向にあることがさらに明

確に示された。

子どもの集団学習に対する発達段階は、資料5「子どものこころと運動」*16から理解できる。つまり、この資料から、子どもの自己や他者の捉え方、集団への所属、仲間関係への意識、運動スポーツへの興味・関心などの学年別特徴は、集団による学習のための準備として発達していくことが理解できる。

このような子どもの集団学習に対する発達段階の特徴から、子どもの集団学習能力と学習形態の不一致は、集団学習に期待される成果をあげられない原因になることが予想され、集団による学習を実施する場合には、学年とともに発達する子どもの集団学習能力を十分に配慮する必要があると考えられる。

以上から、今回の調査対象となった授業のグルーピング方法は、集団による学習には、事前の準備として子どもの集団による学習経験が必要とされる*17ということを踏まえ、子どもの発達段階に合わせた方法が選択されていたことを示すものであると考えられる。

(イ) 領域とグルーピング方法の関係

表16は、授業で行われた運動内容を「現行要領」の領域別にまとめ、各領域別に採用されたグルーピング方法数を示したものである。この表から、ゲーム領域やボール運動領域では、「特別方法」でのグルーピングが多く、その他の領域では逆に「既存方法」が多くなっていることがわかった。

また、基本の運動領域と陸上運動領域で「特別方法」のグルーピングが多くなっていたので、その原因を調べるために、この2領域の運動内容を資料6にまとめた。その結果、これらの領域では、リレーの学習が行われていたことがわかり、それらの領域と同じようにチームとして集団学習が行われていたことによるものであることがわかった。

ゲーム領域やボール運動領域で「特別方法」によるグルーピングが多く行われていたという結果は、これらの領域に含まれる運動が、勝敗を競い合う運動をしたいという欲求から成立したものであり、主として集団対集団の競い合いや仲間と力を合わせて競争することに楽しさや喜びを味わうことができるという特徴を持つことから理解できる。*18

つまり、ゲームやボール運動領域では、平等な競争の前提条件となる運動技

能の問題、また、仲間と力を合わせて競争する前提条件となる人間関係の問題に十分な配慮が行われていたことによるものであると考えられる。

資料5 「子どものころと運動」

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
特 徴	自己中心的様式が残っている。	3年生では、自己中心的・主観的傾向を残すが、感覚的なものの捉え方がある程度論理的になる。	自他の立場が理解できるようになる。自己感情の抑制や協力的態度が向上する。
集団学習にかかわって	組織的な集団遊びがまだできない。	大きな集団遊びや集団への凝集性が高くなる。	集団への所属欲求が高まり、承認欲求も強くなる。
仲間関係	相互の結びつきが弱い、不安定。	リーダーやフォローシップが発達し、仲間での決まりを守るようになる。	集団としての活動ができるようになり、チームとしての役割を理解でき、集団での活動を楽しめる。
運動に対する興味・関心	体を動かすこと自体が目的、上手にできたや全力を出せたなどという結果が満足や評価になる。	競争、克服欲求や顕示欲求が強くなる。簡単なルールのもとでゲームを楽しむなどスポーツの運動に関心を示す。	他者との競争に強い関心を示す、また、自分の興味あることに熱中し、記録向上や目標達成に意欲を持つ。
学習指導に関して	勝敗ではなく、体を動かすことの楽しさを中心とした指導が求められる。	グループを単位とした協力的・競争的運動を中心に、その技能の高まりを中心とした指導が求められる。この時期の楽しさは、ルールを守ることやフェアプレーに影響されるため、ルールのあり方が重要である。	組織的活動によって成立する集団技術を含む運動の学習が必要である。
そ の 他	興味の集中時間が短い。	集中時間が長く、注意深くなる。	リーダーを中心に計画的な学習ができる。

(「高橋健夫 学習者と体育 宇土正彦編著 体育科教育入門 p.21-27 大修館書店 1983)をもとに作成した)

資料6 基本の運動と陸上運動領域の具体的運動種目

基本の運動領域 (15授業)	リレー10 体ほぐしの運動 1 マット遊び 1 ボール遊び 3
陸上運動領域 (12授業)	リレー11 走り高跳び 1 陸上とのみ記載 1

(ウ)「クラスの間関係や雰囲気」の問題とグルーピング方法の関係

表17は、「クラスの特徴(※5)の問題とグルーピング方法の関係を示したものである。この表から、「クラスの特徴」に問題のあった授業では、すべて「特別方法」によるグルーピングが行われていたことがわかった。

(※5 以後、「クラスの間関係や雰囲気」を「クラスの特徴」と略した)。

体育授業をクラス経営の中核に据える指導者も多い。それは、集団で学習が行われる体育授業では、常に助け合いや協力などを行動として求められ、人間関係を高めるためのトレーニングとなるからである。しかし、それだけに「クラスの特徴」に問題のある授業では、集団で行うことが大変な負担となるのは明白である。

表17の結果は、このような体育授業の特徴から、指導者がグルーピングを慎重に、かつ、十分な配慮のもとに行っていたことを示すものである。

表17の「クラスの特徴」に問題のあった11授業について、学年、領域、運動種目、グルーピング時の配慮内容、グルーピング方法、授業後のグルーピングに関わる問題の有無を表17-1にまとめた。この表中の内容についての分析は、今後の研究課題としたい。

(2)「授業の特徴」とグルーピング時における配慮内容の関係

今回の調査では、資料7に示す5つの内容をグルーピング時に行われる配慮内容とした。

資料7 グルーピング時における配慮内容

-
- (1) グループ間の技能的な均等
 - (2) グループ内の人間関係
 - (3) リーダーシップを発揮できる子どもの散らばり具合
 - (4) 運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合
 - (5) グループ分けに子どもたちの気持ちを反映させること
-

それぞれの配慮内容がどの程度に配慮されていたかを比較するため、また、授業の特徴と配慮内容の関係を明らかにするため、順序尺度で求めた回答を簡便法により配慮した程度に従って4点から1点までの間隔尺度に置き換え、各

配慮内容の配慮点とした。表18は、それぞれの平均点を示したものである。

(ア) グルーピング時に配慮される内容の比較

グルーピング時の配慮内容間に程度の違いがあるのかを明らかにするため、表18について1要因被験内分散分析を行ったところ、各配慮内容の平均値には有意な差があることが確かめられた ($p < .0001$)。そこで各内容間の配慮点について t -検定を行い、その結果を簡略し、表18-1に示した。

表18-1の結果から指導者は、グループ間の技能の均等や人間関係に強く配慮してグルーピングを行っていることがわかった。

この結果は、特にボールゲームでは、仲間と力を合わせて競争を楽しむことが学習の中心であるが、実際の授業では、勝敗のみが学習の中心になることが多く、そのため指導者が他の配慮内容の必要性を承知しながらも、ゲームの勝敗に関して個人の能力差が勝敗の結果とならないよう、また、勝敗に関わって責任の押し付け合い、特に身体能力の低い子どもへの押し付けが起こらないよう、グループ間の技能の均衡や人間関係への配慮を行っていたからであると思われる。

(イ) 「授業の特徴」や「クラスの特徴」の問題と配慮内容の関係

学年、領域と配慮内容の関係をみるために、各配慮内容ごとに学年別、領域別、「クラスの特徴」に問題の有無別配慮点の平均値を比較した。その結果、

① 学年の違いが「グループ間の技能的な均等」への配慮の違いに、また、② 「クラスの特徴」の問題の違いが「グループ内の人間関係」への配慮の違いに有意に影響していた。そこで、これらの関係についてのみ、その関係を示し、考察することにした。

① 学年と「グループ間の技能的な均等」への配慮の違い

表19は、「グループ間の技能的な均等」への配慮と学年の関係を明らかにするため、分散分析を行ったものである。その結果、学年の違いは、「グループ間の技術的な均等」への配慮の仕方について有意な条件であることが示された ($p < .05$)。続いて学年間の差を確かめるために多重比較をおこなった。その結果、高学年や中学年では低学年に比べて、「グループ間の技能的な均

等」への配慮が5%水準で有意に強く行われていることが明らかになった。

この結果は、資料5に示す子どもの発達段階から理解することができる。つまり低学年の子どもでは、体を動かすこと自体が目的で、上手にできたや全力を出せたなどという結果が満足や楽しさにつながることから、「グループ間の技能的な均等」の配慮よりも、勢いよく体を動かし、動くことの楽しさを体験させるための配慮が行われていたからであると理解できる。

②「クラスの特徴」の問題と「グループ内の人間関係」への配慮の違い

表20は、「クラスの特徴」の問題と「グループ内の人間関係」への配慮の関係性を明らかにするため、分散分析を行ったものである。その結果、「クラスの特徴」の問題の違いが、「グループ内の人間関係」への配慮の仕方について有意な条件であることが示された($p < .05$)。続いて「クラスの特徴」の問題の違いによる差を確かめるために多重比較をおこなった。その結果、問題のあるクラスの授業では、「問題のない」や「普通」のクラスに比べて、「グループ内の人間関係」への配慮が5%水準で有意に行われていることが明らかになった。

この結果は、当然のことであるが、「クラスの特徴」に問題のあるクラスの授業では、「クラスの特徴」を十分に配慮したグルーピングが行われていたことによるものと理解できる。

表9 授業の特徴（学年別・領域別授業数）

	1		2		3		4		5		6		7		8		n	%
	基本の運動	ゲーム	器械運動	水泳	表現	体づくり運動	陸上運動	ボール運動	合計									
1年	1	6.7	3	8.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	3.0
2年	8	53.3	6	17.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	14	10.6
3年	3	20.0	8	22.9	4	30.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	15	11.4
4年	3	20.0	18	51.4	4	30.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	25	18.9
5年	0	0.0	0	0.0	4	30.8	2	66.7	1	100.0	1	33.3	5	38.5	16	32.7	29	22.0
6年	0	0.0	0	0.0	1	7.7	1	33.3	0	0.0	2	66.7	8	61.5	33	67.3	45	34.1
全体	15	100	35	100	13	100	3	100	1	100	3	100	13	100	49	100	132	100

(平成10年改訂の学習指導要領による領域)

表10 集団学習にかかわるクラスの特徴（クラスの間関係や雰囲気の様子）

	① 大変よかった	② よかった	③ ふつう	④ わるかった	⑤ 心配なことがあった	合計
n	27	61	31	1	10	130
%	20.8	46.9	23.8	0.8	7.7	100

表11・12・15・15-1・16・17に示されるグルーピング方法

- ① 出席番号を利用して
- ② 抽 選 で
- ③ 生活班を使って
- ④ 整列隊形を利用して
- ⑤ 身長順などを利用して
- ⑥ 子どもたちが、グループ力（グループの技能面での均等）を考えて
- ⑦ 指導者が、グループの技術面、運動の得意、不得意、リーダーシップ、グループ内の人間関係などを考えて
- ⑧ その他年度初めに決めた色分けチーム (リレー)
- 50m走のタイムから各グループが平均するように組んだ (リレー)
- 走力順に決定 (リレー)
- 走力別にグループ分けをした (リレー)
- 昨年度のグループ、タイムが同じになるようにしてある (リレー)
- 年度初めに決めた色分けチーム (ドッジボール)
- 走力順に決定 (キックベースボール)
- 泳力に応じてグループ分けをした (水 泳)

表11 グルーピングの方法（どのようにグルーピングが行われましたか）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
n	4	5	24	6	2	32	51	8	132
%	3.0	3.8	18.2	4.5	1.5	24.2	38.7	6.1	100.0

表12 グルーピングの方法（だれがグルーピング方法を決定しましたか）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	全体
n	92	15	18	0	0	1	0	5	1	132
%	69.6	11.4	13.6	0	0	0.8	0	3.8	0.8	100

表13 グルーピングの方法（だれがグルーピング作業を行いましたか）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	全体
n	93	4	12	0	1	10	4	7	1	132
%	70.5	3	9.1	0	0.8	7.6	3	5.3	0.8	100.1

- ①指導者 ②指導者と子どもたち（指導者が子どもたちと相談して、指導者が決めた形にした）
 ③子どもたちと指導者（指導者が子どもたちと相談して、子どもが決めた形にした）
 ④指導者が、指名した代表やキャプテンと指導者が相談して決めた
 ⑤指導者が、指名した代表やキャプテンが相談して決めた
 ⑥子どもたちが、指名した代表やキャプテンと指導者が相談して決めた
 ⑦子どもたちが、指名した代表やキャプテンが相談して決めた
 ⑧子どもたちみんなで相談して決めた ⑨その他 学年の先生で相談

表14 グルーピングの関する配慮内容

		①	②	③	④	全体
		大変気をつかった	気をつかった	あまり気にしなかった	全く気にしなかった	
①	グループ間の 技能的な均等	n 38	72	17	4	131
		% 29.0	54.9	13.0	3.1	100
②	グループ内の 人間関係	n 35	56	36	5	132
		% 26.5	42.4	27.3	3.8	100
③	リーダーシップを発 揮できる子どもの散 らばり具合	n 25	70	32	5	132
		% 18.9	53.1	24.2	3.8	100
④	運動に積極的な子ども と消極的な子どもの 散らばり具合	n 16	69	39	8	132
		% 12.1	52.3	29.5	6.1	100
⑤	グループ分けに子ども たちの気持ちを反映 させること	n 14	49	50	19	132
		% 10.6	37.1	37.9	14.4	100

表15 学年別グルーピング方法

		1年		2年		3年		4年		5年		6年		n	%
														合計	
グ ル ー ピ ン グ 方 法	①	0	0.0	1	7.1	2	13.3	0	0.0	0	0.0	1	2.2	4	3.0
	②	0	0.0	0	0.0	2	13.3	1	4.0	1	3.4	1	2.2	5	3.8
	③	0	0.0	6	42.9	1	6.7	7	28.0	6	20.7	4	8.9	24	18.2
	④	0	0.0	3	21.4	0	0.0	0	0.0	2	6.9	1	2.2	6	4.5
	⑤	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.0	0	0.0	1	2.2	2	1.5
	⑥	0	0.0	0	0.0	3	20.0	4	16.0	8	27.6	17	37.8	32	24.2
	⑦	4	100.0	4	28.6	5	33.3	10	40.0	9	31.0	19	42.2	51	38.6
	⑧	0	0.0	0	0.0	2	13.3	2	8.0	3	10.3	1	2.2	8	6.1
全	体	4	100	14	100	15	100	25	100	29	100	45	100	132	100

表15-1 低中高学年別グルーピング方法

		低学年		中学年		高学年		n	%		
		合計		合計		合計		合計	合計		
グルーピング方法	①～⑤	10	55.6	14	35.0	17	23.0	41	31.1	①～⑤ 既存方法	
	⑥～⑦	8	44.4	22	55.0	53	71.6	83	62.9		⑥～⑦ 特別方法
	⑧	0	0.0	4	10.0	4	5.4	8	6.1		
全 体		18	100	40	90	74	95	132	100		

表16 領域別グルーピング方法

										n	%								
		1 基本の運動	2 ゲーム	3 器械運動	4 水 泳	5 表 現	6 体づくり運動	7 陸上運動	8 ボール運動	合計	合計								
グルーピング方法	①	0	0.0	2	5.7	1	7.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.0	4	3.0		
	②	0	0.0	2	5.7	1	7.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	4.1	5	3.8		
	③	6	40.0	4	11.4	5	38.5	0	0.0	1	100.0	2	66.7	1	7.7	5	10.2	24	18.2
	④	3	20.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	7.7	2	4.1	6	4.5		
	⑤	0	0.0	1	2.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.0	2	1.5		
	⑥	1	6.7	6	17.1	2	15.4	0	0.0	1	33.3	1	7.7	21	42.9	32	24.2		
	⑦	3	20.0	18	51.4	4	30.8	2	66.7	0	0.0	0	0.0	7	53.8	17	34.7	51	38.6
	⑧	2	13.3	2	5.7	0	0.0	1	33.3	0	0.0	0	0.0	3	23.1	0	0.0	8	6.1
全 体		15	100	35	100	13	100	3	100	1	100	13	100	49	100	132	100		

表17 「クラスの特徴」別グルーピング方法

										n	%		
		① 大変よかった	② よかった	③ ふつう	④ わるかった	⑤ 心配なことがあった	合計	合計					
グルーピング方法	①	0	0.0	2	3.3	2	6.5	0	0.0	0	0.0	4	3.1
	②	2	7.4	3	4.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	3.8
	③	8	29.6	8	13.1	8	25.8	0	0.0	0	0.0	24	18.5
	④	1	3.7	2	3.3	3	9.7	0	0.0	0	0.0	6	4.6
	⑤	1	3.7	1	1.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	1.5
	⑥	7	25.9	15	24.6	5	16.1	1	100.0	2	20.0	30	23.1
	⑦	8	29.6	23	37.7	13	41.9	0	0.0	7	70.0	51	39.2
	⑧	0	0.0	7	11.5	0	0.0	0	0.0	1	10.0	8	6.2
全 体		27	100	61	100	31	100	1	100	10	100	130	100

① の授業は、50m走のタイムをもとにチームの平均タイムを同じにしている

表17-1 「[クラスの特徴]」に問題のあった授業におけるグルーピング方法」

通番号	領域	学年	内 容	グルーピングの方法			配 慮 内 容					問題の有無	
				A	B	C	ア	イ	ウ	エ	オ		合
1	基本の運動	3	リレー	6	1	1	1	3	2	2	3	11	有
2	ゲ ー ム	3	ベースボール型ゲーム	7	1	1	1	1	2	3	2	9	無
3	ゲ ー ム	3	ドッジボール	6	3	3	1	2	3	2	2	10	無
4	ゲ ー ム	4	サッカー	7	1	1	2	1	2	3	3	11	有
5	ゲ ー ム	4	サッカー	7	1	1	2	1	2	2	1	8	有
6	ゲ ー ム	4	ベースボール型ゲーム	7	1	1	3	1	2	2	1	9	有
7	陸上運動	5	リレー	8	1	1	1	2	2	3	4	12	有
8	陸上運動	6	リレー	7	1	2	1	2	1	3	2	9	有
9	ボール運動	6	バスケットボール	6	8	8	2	1	2	2	2	9	有
10	ボール運動	6	バスケットボール	7	1	1	2	1	2	1	3	9	有
11	ボール運動	6	バスケットボール	7	1	1	1	1	1	1	2	6	有

● グルーピング方法

- A グルーピングの方法 (どのような方法で決まりましたか)
- B グルーピングの方法 (だれがグルーピング方法を決定しましたか)
- C グルーピングの方法 (だれがグルーピング作業を行いましたか)

Aの選択肢

- ① 出席番号を利用して ② 抽選で ③ 生活班を使って ④ 整列隊形を利用して
- ⑤ 身長順などを利用して
- ⑥ 子どもたちが、グループ力(グループの技能面での均等)を考えて
- ⑦ 指導者が、グループの技術面、運動の得意、不得意、リーダーシップ、グループ内の人間関係などを考えて

BCの選択肢

- ① 指導者 ② 指導者と子どもたち(指導者が子どもたちと相談して、指導者が決めた形にした)
- ③ 子どもたちと指導者(指導者が子どもたちと相談して、子どもが決めた形にした)
- ④ 指導者が、指名した代表やキャプテンと指導者が相談して決めた
- ⑤ 指導者が、指名した代表やキャプテンが相談して決めた
- ⑥ 子どもたちが、指名した代表やキャプテンと指導者が相談して決めた
- ⑦ 子どもたちが、指名した代表やキャプテンが相談して決めた
- ⑧ 子どもたちみんなで相談して決めた ⑨ その他 学年の先生で相談

● グルーピング時の配慮内容

- ア グループ間の技能的な均等
- イ グループ内の人間関係
- ウ リーダーシップを発揮できる子どもの散らばり具合
- エ 運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合
- オ グループ分けに子どもたちの気持ちを反映させること

アイウエオの選択肢

- ① 大変気をつかった ② 気をつかった ③ あまり気にしなかった ④ 全く気にしなかった

表18 グルーピング時における配慮内容の比較
(配慮内容点の平均値比較と1要因被験者内計画による分散分析結果)

	平均	標準偏差	要因	自由度	平方和	平均平方	F値	P値
① グループ間の技能的な均等	3.01	0.73	条件	4.00	31.44	7.86	16.37	<.0001
② グループ内の人間関係	2.92	0.83	個人差	130.00	149.44	1.15		
③ リーダーシップを発揮できる子どもの散らばり具合	2.89	0.74	残差	520.00	249.76	0.48		
④ 運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合	2.72	0.75	全体	654.00	430.64	9.49		
⑤ グループ分けに子どもたちの気持ちを反映させること	2.45	0.86						

表18-1 グルーピング時の配慮内容間の比較

内 容	①	②	③	④	⑤
平 均	3.01	2.92	2.89	2.72	2.45
① グループ間の技能的な均等	t 値 有意確立 関係	1.903 有意差なし	2.735 *** ①>③	4.958 *** ①>④	6.615 *** ①>⑤
② グループ内の人間関係		t 値 有意確立 関係	0.696 有意差なし	2.567 ** ②>④	5.075 *** ②>⑤
③ リーダーシップを発揮できる子どもの散らばり具合			t 値 有意確立 関係	2.359 ** ③>④	4.456 *** ④>⑤
④ 運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合				t 値 有意確立 関係	2.908 *** ④>⑤
⑤ グループ分けに子どもたちの気持ちを反映させること					t 値 有意確立 関係

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表19 「グループ間の技能的な均等」への配慮と学年の関係

		学 年			1要因分散分析 F値	多重比較 LSD (p<.05)
		a 低学年	b 中学年	c 高学年		
① グループ間の技能的な均等	N	18	40	73	4.00*	a<b a<c
	M	2.67	3.23	3.14		
	SD	0.69	0.62	0.77		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表20 「グループ内の人間関係」への配慮と「クラスの特徴」の問題との関係

		人 間 関 係			1要因分散分析 F値	多重比較 LSD (p<.05)
		a よい	b 普通	c 心配		
① グループ間の技能的な均等	N	87	31	11	3.57*	a<c b<c
	M	3.05	3.10	3.45		
	SD	0.66	0.91	0.69		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

3 授業後のグルーピングに関わる問題の有無

(1)「授業後のグルーピングに関わる問題の有無」と学年・種目・領域の関係
グルーピングに関わると思われる問題を残した授業数は、132授業中33授業であった。この33授業について、学年、種目、領域、問題の内容（内容については「人間関係」と「勝敗」の区別をおこなった）を表21に示した。さらに、この表から学年別に問題の内容と運動種目を表22にまとめた。その結果、低中学年では「勝敗」に起因する問題が多く、高学年では逆に「人間関係」に起因する問題の多いことがわかった。

低中学年の結果は、低中学年の子どもたちがすでに、競争—勝敗という関係にこだわっていることや、みんなで運動を楽しむということではなく、勝敗が運動の動機づけになっている授業が展開されたことによるものではないかと思われる。

特に今回の調査では、リレー学習の28授業中7授業に問題が残った。また、低中学年の「基本の運動」領域で行われたリレーの授業では、10授業中5授業に問題が残っていた。さらに問題が残った低中学年のリレーに限れば、5授業中3授業が「勝敗」に関わった問題を残していた。（残りの2授業は問題の内容が未記入であった）

このように低中学年のリレー学習に「勝敗」に関わった問題を残した授業が多くなった理由は、資料5「子どものこころと運動」の「運動に対する興味・関心」から考えることができる。つまり、リレー競争は、走ることが楽しい子どもにとって、さらにその楽しさを高める手段として扱われるべきものである。しかし、レースの勝敗や記録による順位付を目標とした学習が進められた場合、陸上運動の特性が記録や順位として個人の出来栄を明確に示すことから、子どもの発達段階と学習内容に不一致がおり、「勝敗」の結果を原因としたグルーピングの問題を残すことになっていると考えられる。

また、高学年の結果は、高学年に採用される学習形式によるものではないかと思われる。つまり、高学年では、勝敗の結果からチームの作戦や課題を自分たちで見つけ解決する問題発見解決学習形式の授業がおこなわれることが多い。このような授業では、子どもたちが勝敗の結果を自分たちの作戦や課題解決の到達目標に位置づけ、「課題発見—課題解決」のサイクルとして学習が進められがちである。しかし、勝敗の結果を学習の到達目標とした場合、どうしても

勝敗の結果が強調されることが多くなる。表21, 22に示される高学年の「人間関係」に関わった問題の多さは、授業で採用される勝敗の結果を到達目標とする学習サイクルによるものではないかと考えられる。このような学習形式をとる場合、勝敗の結果を「課題発見—課題解決」の結果でなく、授業で課題解決に向けた学習をどれだけ行ったかをゲーム結果から確認させ、新たな学習の起点とすることが必要である。

(2) 中高学年の「ゲーム」(※6) とリレー学習におけるグルーピング方法別「グルーピングに関わる問題の有無」数の関係

学年別に全授業数中の「問題の残った授業」(※7) 数の比率を問題率として計算したところ、表23のように中高学年に高い比率が認められた。また、同様に領域別に全授業数中の「問題の残った授業」数の比率を問題率として計算したところ、表24のようにボール運動、ゲーム、基本の運動(リレー)に高い数値が示された。(※6 以後、ゲーム領域の運動とボール運動を合わせて「ゲーム」と表記し、※7「グルーピングに関わる問題のあった授業」を「問題のあった授業」と略した)

さらに、表24で問題率の高かった領域の運動種目である「ゲーム」とリレーについて問題率を計算した。その結果、表25のように「ゲーム」では全授業数の28.6%、リレーでは25.0%が「問題の残った授業」であった。

そこで、授業後に問題を残さないグルーピング方法を明らかにするため、表23, 24, 25の結果から、問題率の高かった中高学年の「ゲーム」とリレー学習では、どのようなグルーピング方法が実施されていたかを表26にまとめた。

その結果、⑦「指導者が、グループの技術面、運動の得意、不得意、リーダーシップ、グループ内の人間関係などを考えた」というグルーピング方法を採用した36授業中、38.9%に当たる14授業が「問題の残った授業」であった。特に、中学年では13授業中半数を超える7授業が「問題の残った授業」となっていた。

この結果には、「クラスの特徴」に問題のあったクラスの11授業中7授業が含まれていた。この7授業では、表20に示されたように特に技術的な均等について配慮が行われていたことが明らかにされているが、この配慮をグルーピングに反映させるために、指導者によるグルーピング方法が選択されたものと思われる。

しかし、⑥「子どもたちが、グループ力（グループの技能面での均等）を考えた」グルーピング方法の29授業中「問題の残した授業」は、17.2%に当たる5授業でしかなかったことからすれば、「クラスの特徴」に問題のあった授業数だけでなく、指導者によるグルーピング方法に問題があるのではないかと考えることが必要である。

このことについて、ここでは表18-1に示したグルーピン時の配慮内容間の比較をもとに考察することにした。この表18-1では、指導者がグルーピング時に配慮する内容は、①「技術的な均等」、②「グループ内の人間関係」、③「リーダーシップのある子どもの散らばり具合」、④「運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合」、⑤「子どもたちの気持ち」の順に強くなることが明らかにされた。

このことから指導者は、「勝敗」や「人間関係」を重要な配慮内容としたグルーピングをおこなっていると考えられる。しかし、これらの配慮は、見方を変えれば、集団による学習をうまく進めるための予防的マネジメント^{*19}として行われた配慮でないかと思われ、子どもたちがこの配慮結果を必ずしも好意的に受け取めるとは限らないということを考える必要がある。一方、子どもたちによるグルーピングでは、運動能力や体育時の人間関係だけでなく、体育時以外の人間関係や考え方の違いが反映されているものと考えられる。さらに資料5にみられるようにスポーツ的運動の楽しさに興味をもち、集団の決まりを大切に、自分たちの世界をつくろうとする中高学年の子どもの発達段階からは、指導者とは異なる勝敗観やスポーツ観が反映されているとも考えられる。

これらのことは、「グルーピングに子どもたちの気持ちを反映させる」ことが、配慮内容で最も低い内容となっていたことから理解できる。

以上から、グルーピングに関わった問題を残さないためには、子どもにグルーピングを行わせることも一つの方法であるといえる。しかし、グルーピングを子どもたちに任せ、子どもたちの気持ちを反映させることは、子どもたちにグルーピングを自由に行わせるものでない。その際には、子どもたちに、リーダーシップやフォロワーシップの大切さや、運動の得意・不得意や男女による違いは、それぞれの個性として捉え、みんなが運動・スポーツを楽しむことの大切さを十分に学ばせることが必要である。

表21 グルーピングに関する問題の残った授業の学年・種目・領域と問題内容

番号	学年	種目	領域	内容	
1	2	リレー	基本の運動	勝敗	リレーの結果にこだわる子どもがいた
2	2	ボールゲーム	ゲーム	勝敗	勝敗にこだわり、相手チームがずるいことをしたと責める
3	3	リレー	基本の運動	未	未記入
4	3	リレー	基本の運動	勝敗	特別支援学級の子どものいるチームで、どうせ勝てないとあきらめる子どもがいた
5	3	ボートボール	ゲーム	人間関係	リーダーシップを発揮すると考えた子どもが発揮しなかった
6	3	ならびっこ ベースボール	ゲーム	人間関係	リーダーのいないグループはまとまることができなかった
7	3	サッカー	ゲーム	勝敗	勝敗を気にするあまり、不得意な子どもを責める場面があった
8	3	ボールゲーム	ゲーム	勝敗	運動の得意な子どもが自己中心的に進めようとしたり、周りをせめたりすることがあった
9	4	リレー	基本の運動	未	未記入
10	4	リレー	基本の運動	勝敗	グループ内に運動が苦手な子どもがいたとき、なかなか勝てずに文句を言ったりする子どもがいた
11	4	キックベース ボール	ゲーム	勝敗	グループ内に運動が苦手な子どもがいたとき、なかなか勝てずに文句を言ったりする子どもがいた
12	4	ハンドベース ボール	ゲーム	人間関係	下手な子どもを責める場面があった
13	4	ベースボール型	ゲーム	勝敗	勝敗にこだわる子どもが入ることでチームの雰囲気が悪くなる
14	4	サッカー	ゲーム	勝敗	チーム力の違いを主張する比較的運動能力の高い子どもの苦情があった
15	4	サッカー型	ゲーム	勝敗	うまい子どもが苦手な子どもがチームに入るのをいやがる
16	4	マット運動	器械運動	人間関係	目標設定に関わって、グループの意見が分かれた
17	5	体づくり運動	体づくり運動	人間関係	命令口調の子どもに対する不満でもめた、グループ学習が初めてだったので、とまどっていた
18	5	リレー	陸上運動	勝敗	特定の子どもも同志チームになりたい、事前に勝敗を予想して、やる気をなくす
19	5	バスケット	ボール運動	人間関係	チーム内の人間関係がうまくいかず、やる気をなくしたことがあった
20	5	バスケット	ボール運動	人間関係	技術が優れているのにうまく教えられず、ワンマンプレーになった子どもがいた

21	5	ソフトボール	ボール運動	人間関係	女子のグループでミスをしたとき、相手からヤジが飛んでもめた
22	5	ハンドボール	ボール運動	人間関係	3人組だったが、1チームの人間関係がうまくいかなかった
23	6	リレー	陸上運動	人間関係	バトンパスがうまくいかないときや、タイムが伸びないときに雰囲気が悪くなった
24	6	バスケット	ボール運動	人間関係	男女の仲が悪く、協力できなかった
25	6	バスケット	ボール運動	人間関係	苦手な子や体育嫌いの子がうまく関われなかった
26	6	バスケット	ボール運動	勝 敗	強いチーム弱いチームがはっきりしていた
27	6	バスケット	ボール運動	勝 敗	技能的にずば抜けて優れた子どものいるチームがいつも勝ち、負ける周りのチームが不平を漏らす、それを引きつり休み時間に文句を言う。仲の良かった友達が悪くなった。それだけ勝敗に夢中になれるバスケットボールであったと言えるのだが、悔しい思いや不平不満を持つことに大変気を使った。
28	6	バスケット	ボール運動	人間関係	優れた技能のもち主にボールが集まりトラブルになることがあった。チーム内ではトラブルがあった方が良く考えている
29	6	ベースボール型	ボール運動	勝 敗	チーム力の技能的な均等へのこだわりによりグループ決定に時間がかかった
30	6	ドッジボール	ボール運動	勝 敗	男子のチームに力の差ができてしまった
31	6	サッカー	ボール運動	未	未記入
32	6	ソフトバレーボール	ボール運動	未	未記入
33	6	ソフトバレーボール	ボール運動	人間関係	人間関係

表22 グルーピングに関わる問題を残した授業における学年別運動種目別問題内容

	内 容	リレー	ゲーム	その他	合 計
低 学 年	勝 敗	1	1	0	2
	人間関係	0	0	0	0
	未 記 入	1	0	0	1
中 学 年	勝 敗	2	6	0	8
	人間関係	0	3	1	4
	未 記 入	1	0	0	1
高 学 年	勝 敗	1	4	0	5
	人間関係	1	8	1	10
	未 記 入	0	2	0	2
合 計		7	24	2	33

表23 グルーピングに関する問題の残った授業数の比率（学年別）

	低 学 年	中 学 年	高 学 年	全 体
問題の残った授業数	2	14	17	33
全 授 業 数	18	40	74	132
問 題 率 %	11.1	35.0	23.0	25.0

表24 グルーピングに関する問題の残った授業数の比率（領域別）

	ボール 運 動	ゲーム	基本の 運 動	陸上運動	体づくり 運 動	器械運動	水 泳	表 現	全 体
問題の残った授 業 数	14	10	5	2	1	1	0	0	33
割 合 %	42.4	30.3	15.2	6.1	3.0	3.0	0.0	0.0	100.0
全 授 業 数	49	35	15	13	3	13	3	1	132
問 題 率 %	28.57	28.57	33.33	15.38	33.33	7.69	0	0	25.00
種 目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑤	⑥	

① バスケットボール7 バレーボール2 野球型2 ドッジボール1 サッカー1 ハンドボール1

② 野球型4 サッカー3 ボールゲーム2 バスケットボール1

③ リレー5

④ リレー2

⑤ 体づくり運動1

⑥ マット運動1

割合(%) = 問題の残った全授業数に占める割合 (%)

表25 ボールゲームとリレーにおける「問題の残った授業」数の比率（問題率）

	ボールゲーム	リ レ ー	そ の 他	全 体
問題の残った授業数	24	7	2	33
割 合 %	72.7	21.3	6.0	100.0
全 授 業 数	84	28	16	128
問 題 率 %	28.6	25.0	12.5	25.9

割合(%) = 問題の残った全授業数に占める割合 (%)

表26 中高学年の「ゲーム」とリレーにおける「問題の残った授業」数の比率(問題率)

グルーピング方法			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
中学 年	ボール ゲーム	問題 有	0	1	0			1	6	1	9
		無	1	1	3		1	5	5	1	17
	リレー	問題 有			1			1	1	1	4
		無			0			0	1	1	2
高学 年	ボール ゲーム	問題 有	0	2	1	2	0	3	6		14
		無	1	0	4	0	1	18	11		35
	リレー	問題 有				0		0	1	1	2
		無				1		1	5	2	9
問題の残った授業数の合計			0	3	2	2	0	5	14	3	29
合 計			2	4	9	3	2	29	36	7	92

- ① 出席番号を利用して ② 抽選で ③ 生活班を使って ④ 整列隊形を利用して
 ⑤ 身長順などを利用して ⑥ 子どもたちが、グループ力（グループの技能面での均等）を考えて
 ⑦ 指導者が、グループの技術面、運動の得意、不得意、リーダーシップ、グループ内の人間関係などを考えて
 ⑧ その他 年度初めに決めた色分けチーム (リレー)
 50m走のタイムから各グループが平均するように組んだ (リレー)
 ※ 表中の空白は方法が選択されていないことを示す

V まとめと今後の課題

体育授業におけるグルーピング方法のあり方を明らかにする基礎研究として、

1 指導者のグルーピングに関する問題意識、2 授業で行われているグルーピング方法の実際 3 授業後にグルーピングに関わる問題 について実態を明らかにし、考察を加えた。

1 小学校指導者のグルーピングに関する問題意識

指導者のグルーピングに対する問題意識をまとめ、さらに、問題意識の持ち方と指導者の特徴（経験年数、性別、「得意度」）の関係について考察した。その結果、以下の内容が明らかになった。

(1) グルーピングに関する問題意識の実態

- ① グルーピング問題は、指導者全体から授業に関わる多様な問題の中でも大きな問題であり、しかも、それは授業の成否を決定する重要な問題であ

ると意識されていることが認められた。

- ②「事前調整の必要性に関する意識」と「学習内容性に関する意識」に関する意識の持ち方は、指導者の「経験年数」、「性」、「得意度」に関係しないことが認められた。

(2) グルーピングに関する問題意識と経験年数の関係

「グループ分けは授業の成功・失敗を決定する大きな要因である」という問題意識の持ち方について、経験年数21年以上の指導者が、経験年数10年以下の指導者に比べて有意に高い問題意識を持っていることが明らかになった($p<.05$)。

(3) グルーピングに関する問題意識と性別、授業の得意度別の関係

女性指導者では、①「グループ分けは授業における大きな問題である」という問題意識について、授業を「得意とする指導者」と「不得意」とする指導者は、「どちらでもない」という指導者に比べて、有意に高く問題意識を持っていることが明らかになった ($p<.05$)。

以上から、指導者のグルーピングに関する意識は、集団学習を手段とするか目的とするかに関する考え方によって、「事前調整の必要性に関する意識」と「学習内容性に関する意識」の持ち方には個人差が認められたが、グルーピング問題は指導者全体から授業に関わる大きく重要な問題であると意識されていることが認められた。

また、グルーピング問題に関する意識の持ち方の違いは、経験年数や女性の授業の得意度などの一部の特徴を除けば、本研究で指導者の特徴とした「経験年数」や性別、「得意度」に影響を受けないことが認められた。

このようにグルーピング方法が、指導者に共通した大きく重要な問題となっていることから、新学習指導要領の求める学習内容を確実に身に付けさせる授業方法として、集団学習を手段とする授業であっても、また、集団学習を目的とする授業であっても、集団学習の効果を確実に発揮する授業のスタートとなるグルーピング方法の開発が必要であることが再確認された。

2 グルーピング方法の実際

グルーピング方法の実際をまとめ、さらに、グルーピング方法やグルーピン

グ時に配慮された内容と授業の特徴（学年、運動種目）やクラスの特徴（クラスの間関係や雰囲気に関する問題の程度）の関係について考察した。その結果、以下の内容が明らかになった。

（1）グルーピング方法と「授業の特徴」および「クラスの特徴」の関係

グルーピング方法の実態から、調査対象となった授業では、子どもの発達段階や運動の特性に応じたグルーピング方法が採用されていたことが示された。

また、人間関係や雰囲気に関する問題のある全クラスの授業で運動能力や人間関係などを考えたグルーピング方法が採用されていたことが示された。

（2）グルーピング時に配慮される内容の強さの比較

指導者は、グルーピング時にどのような内容を配慮しているかの強さには有意に差があり ($p < .0001$)、各配慮内容間には、以下のように有意な差があることが明らかになった。配慮内容間における配慮の程度比較の結果は以下のようであり、「グループ間の技術的な均等」や「グループ内の人間関係」について強く配慮されていたことが明らかになった。

（3）学年・領域・「クラスの特徴」の問題と配慮内容の関係

① 学年と「グループ間の技能的な均等」への配慮の違い

高学年や中学年では、低学年に比べて「グループ間の技能的な均等」への配慮が有意に強く行われていることが明らかになった ($p < .05$)。

配慮内容間における配慮の程度比較の結果

-
- 「技術的な均等」 > 「リーダーシップのある子どもの散らばり具合」 ($p < .001$)
 - 「技術的な均等」 > 「運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合」 ($p < .001$)
 - 「技術的な均等」 > 「子どもたちの気持ち」 ($p < .001$)
 - 「グループ内の人間関係」 > 「運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合」 ($p < .001$)
 - 「グループ内の人間関係」 > 「子どもたちの気持ち」 ($p < .001$)
 - 「リーダーシップのある子どもの散らばり具合」 > 「運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合」 ($p < .01$)
 - 「リーダーシップのある子どもの散らばり具合」 > 「子どもたちの気持ち」 ($p < .001$)
 - 「運動に積極的な子どもと消極的な子どもの散らばり具合」 > 「子どもたちの気持ち」 ($p < .001$)
-

② 「クラスの特徴」の問題と「グループ内の人間関係」への配慮の違い

「クラスの特徴」に問題のある授業では、「問題のない」や「普通」のクラスに比べて、「グループ内の人間関係」への配慮が有意に行われていることが明らかになった ($p<.05$).

以上、グルーピング方法の実際から、グルーピング時には、「グループ間の技能的均等」や「人間関係」について強く配慮され、特に中高学年や「クラスの特徴」に問題のあった授業では、強く配慮されていたことが明らかになった。

このようなグルーピング方法の実際から、新学習指導要領の求める学習内容を確実に身に付けさせるためのグルーピング方法として、中高学年の授業や「クラスの特徴」に問題のある授業における「グループ間の技能的均等」や「人間関係」の配慮の仕方を明らかにすることが必要であるといえる。

3 授業後のグルーピングに関わる問題の有無

グルーピングに関わる問題が起こった理由を学年、領域、クラス「クラスの特徴」の問題、グルーピング方法の実際、グルーピング時の配慮内容から検討した。その結果を統計的に明らかにできなかったが、以下のことが認められた。

- (1) 低中学年でグルーピングに関わった問題を残した授業では、「勝敗」に起因する問題が多く、高学年では逆に「人間関係」に起因する問題の多いことが認められた。
- (2) グルーピングに関わった問題を残した授業の全授業に対する発生率は、学年別にみると中高学年に、領域・運動種目別にみるとボール運動、ゲーム、基本の運動（リレー）に高いことが認められた。
- (3) 指導者による「グループの技術面、運動の得意、不得意、リーダーシップ、グループ内の人間関係などを考えた」グルーピング方法を採用した授業は、子どもたちによる「グループの技能面での均等を考えた」グルーピング方法を採用した授業に比べて、グルーピングに関わった問題を残す確率の高いことが認められた。

以上をまとめると、授業後にグルーピングに関わる問題の残った授業数は総

授業数の1/4にあたる33授業になり、非常に高率であった。このことは、グルーピング方法のあり方を対象とする研究の必要性を示すものであるといえる。

33授業における問題の内容は、低中学年では「勝敗」、高学年では、「人間関係」であった。また、問題を残した授業の多くは「ゲーム」とリレーの学習が行われていた。さらに、「クラスの特徴」に問題のあった11授業の中で問題を残さなかった授業は、表17-1に示すように2授業しかなく、残り9授業では問題を残した。

さらに「ゲーム」とリレー学習に限れば、指導者が、技能や人間関係など多くの内容を考えておこうグルーピング方法を採用した授業に「問題の残った授業」が多いことが認められた。

このような「授業後のグルーピングに関する問題の有無」の実際から、新学習指導要領の求める学習内容を確実に身に付けさせるためのグルーピング方法として、特に中高学年の「ゲーム」、全学年でリレーの学習におけるグルーピング方法を明らかにすることが必要であるといえる。さらに、これらの結果と指導者によるグルーピングが行われた授業に問題の残った授業が多かったことを合わせると、「ゲーム」とリレーの授業における指導者によるグルーピング方法の見直しが必要であるといえる。

小学校指導者にグルーピングに関する調査を実施し、その実態を整理、分析し、考察をおこなったところ以上のような結果が得られた。しかし、本研究の最終目標は、新学習指導要領の求める学習内容を確実に身に付けさせるグルーピング方法を明らかにすることである。この課題の解決のためには、授業後のグルーピングに関する問題の有無とグルーピング方法の関係をさらに明らかにしなければならないが、今回の研究では、方法的限界から傾向を示すのみとなった。今後は、問題の有無を授業成果とした分析が必要である。また、子どもによるグルーピング方法の評価を加えた研究が必要であると思われる。

謝 辞

末尾になりましたが、公務ご多忙のところ、本研究のため調査の実施にご協力いただきました72名の先生方に深謝申し上げます。

引用・参考文献

- * 1 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 p.51 東洋館出版 2008
- * 2 岡澤祥訓・高橋健夫 よい体育授業の条件 高橋健夫編著 体育の授業を創る pp.10-24 大修館書店 1994
- * 3 高橋健夫 体育授業を観察評価する 高橋健夫編著 体育授業を観察評価する pp.1-6 明和出版 2003
- * 4 高島稔 体育の学習形態 体育科教育法講義 p73 大修館書店 1992
- * 5 児島邦宏 集団と個の指導スキル 東洋・中島章夫監修 授業技術講座3教師の実践的能力と授業技術 pp.92-111 ぎょうせい 1988
- * 6 文部科学省 小学校学習指導要領体育編 p.3 東洋館出版 2008
- * 7 友添秀則 学習集団をめぐる論議過程 竹田清彦ほか編 体育科教育学の探求 pp.284-300 大修館書店 1997
- * 8 時本識次 学習集団 キーワード保健体育科教育 pp.156-157 不昧堂出版 1996
- * 9 高島稔 体育の学習形態 体育科教育法講義 pp.66-77 大修館書店 1992
- * 10 高島稔 体育の学習形態 宇土正彦編集 体育科教育法入門 pp.76-87 大修館書店 1983
- * 11 出原泰明著 体育の授業方法論 pp.112-119,177-202 大修館書店 1991
- * 12 友添秀則 体育の学習形態論 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著 体育科教育学入門 pp.89-97 大修館書店 2002
- * 13 児島邦宏 集団と個の指導スキル 東洋・中島章夫監修 授業技術講座3教師の実践的能力と授業技術 pp.92-111 ぎょうせい 1988

- * 14 文部省 小学校体育指導資料 新しい学力観に立つ体育科の授業の工夫
p.73 東洋館出版 1995
- * 15 グリル・シーデントップ著 高橋健夫監訳 新しい体育授業の創造 p.63
大修館書店 2003
- * 16 高橋健夫 学習者と体育 宇土正彦編著 体育科教育入門 p.21-27
大修館書店 1983
- * 17 友添秀則 体育の学習形態論 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖
編著 体育科教育学入門 p.95 大修館書店 2002
- * 18 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 p.17 東洋館出版 2008
- * 19 岡出美則 体育の授業づくりの構造 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩
田靖編著 体育科教育学入門 pp.132-139 大修館書店 2002